

子どもと共に目指す世界平和：新しい国際交流の形を模索して —子供の心の中に平和の砦を築く—

大神 のりえ

研究の目的と方法

本論文では自分の生い立ち、ユネスコ活動、インド国際子供村「ハッピーバリー」の活動を通して、私がこれまで感じたこと、また活動を通して確信した事を文章にまとめることにより子供の心の中に平和の砦を築きたいと思いながら25年間やってきたことが果たしてどのような意味があったのか、そしてその活動をこれからどのように展開していったらいいのか、この論文を書くことによって得た知識がこれからの活動にどのように結びつくのか、生かされていくのか追求する事を研究課題とし、更に今後の国際交流の新しい形として広く提言を行いました。

論文の構成

はじめに

第1章 子どもと共に目指す

- 1 子どもと私との関係
- 2 子どもに固執する理由
- 3 子どもと共に学ぶ
- 4 私が子どもと共に目指すこと

第2章 インド国際子ども村「ハッピーバリー」

- 1 目的
- 2 思いつくまでそして構想へ
- 3 土地探しから、購入まで
- 4 どんな人がどんな形で集まってきたのか 組織になるまで
- 5 開発
- 6 インド現地での思い-マニカトさんのコメント-
- 7 どのような活動をしてきたのか？
- 8 活動の経済的な支え
- 9 インドであることの意

第3章 ハッピーバリーの評価

- 1 研究テーマ
- 2 アンケート調査の内容
- 3 アンケートの結果
- 4 アンケート調査についての反省点

5 まとめ

むすび

あとがき

論文の概要

「戦争は人の心の中に生まれる——」。

多分誰もが一度や二度はなぜ戦争が絶えないのだろうかという疑問を持つだろうと思います。そしてそれに明確な答えが出せないまいつしかその疑問を忘れてしまう。私の場合もそれと同じようにいつも「戦争はなぜ起こるのだろうか」という疑問が浮かんで消えまた現れてくるという繰り返しでした。色々な原因が重なり合って戦争という事態に陥っていくのでしょうけれど、一番根の部分についてはっきりとした答えが見つかりませんでした。「戦争は人の心の中に生まれる——」この言葉を聞いたとき。すっ—と私の中に入っていたのです。それは長い間抱いていた疑問のとても明確な答えでした。心の中に生まれるのだから心の中に平和の砦を築く。そうだこれなら私にも出来るかもしれない。私だけでなく縁あって一緒に過ごす人々にもこの事を伝えられるかもしれない。もしかしたら、このユネスコ憲章の前文に書いてあることを実現することが私の人生の命題かもしれないと感じたのです。

誰の心の中に平和の砦を築くのか？そして、私が選んだのは私が一番好きな子どもだったのです。子どもたちの心の中に平和の砦を築きたい。私はそう強く思うようになりました。

この論文では「子どもと共に目指す世界平和—新しい国際交流の形を模索して—」と題して、いかに子どもの心の中に平和の砦を築いていったのかを述べました。

第1章では、子どもと共に目指していく意思を固めた理由について詳しく説明し、何故私が子どもを選んだのか、私にとって何故子どもでなければならないのかという必然性について、説明しました。

第2章では、17年間に渡って行っている活動インド国際子ども村「ハッピーバリー」について詳しく説明しました。

第3章では、第2章で取り上げた活動の評価を子どもたちからのアンケートに基づいて考察しました。こうすることによって今まで見えてこなかったことが見えてき、また今まで出来なかったことが何であったのか、またどのようにすればそれができるようになるかを探りました。

人間が戦争をする場合、人間の数を数える時は「1人2人」であり、自分の大切な人を数える時は「ひとり、ふたり」なのです。この違いは人格があるかなしかなのです。人格のある存在として世界中の人が認められたら戦争は起こらないのです。人間の「ひとりひとり」が数字の「1人2人」に置き換えられない大切なものとして存在しなければならないのです。

子どもたちはインドでの色々な体験から一人一人が個性を持って生きていると感じ、それぞれの人が生き生きと生きていることに感動を覚えています。また自分達の価値観を覆

すような体験から、違うことを認めること、違いを楽しむこと、その違いが自分にとって刺激的だと感じたこと、答えが一つでないということを実感しています。「違いがわかり、違いを認め、違う人々と共に生きる喜び」を見出しています。その経験を通じ自分の生き方についても考えていこうとしています。

そして何より体験を思い出すことで心の安らぎを覚えることはまさにインドの国や人々にかけてえのない思いを抱いているということだと感じています。このかけがえのない思いこそが平和の砦だといえないでしょうか？かけがえのない思いがこの地球の隅々にまで染み渡っていくこと、それがハッピーバリーの願いであるといえます。

私が提言する国際交流の形、「それはなるべくゆっくりと行動をし、多様性を受け入れられる時間をつくりながら交流をするということです」。そのようにした交流こそが、子どもたちにかけてえのない思いを抱かせることになるのです。大人の考える国際交流のありかたではなく子どもたちに「かけがえのない存在」を肌で感じさせることこそがこれからの国際交流に必要なのです。そのような国際交流を目指してこれからも進んでいきたいと思えます。

この論文を書くことによってこれから生きていくであろう私の50年の道筋がはっきりと示されました。この活動は私が「言い出しっぺ」です。だからこれから先もずっとやり続けます。しかしこれから先は子どもたちの意見に従いながら進もうと決めました。

「子どもと共に世界中にかけてえのない存在をつくっていくのです。ゆっくりとたっぷりと確かめ合うことをしながら」